様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０４７４４

研究課題名（和文）「生活科・総合的な学習」に関する指導力・カリキュラム開発能力の向上に関する研究

研究課題名（英文）Study about improvement on ability of leadership and the curriculum development for "Living Environment Studies and Integrated Studies"

研究代表者
宇佐見　香代（USAMI, Kayo）

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：２０２９４２７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、生活科・総合的な学習の時間領域の実践研究に焦点化して調査研究を行い、充実した実践を生み出す教師の指導力・指導性の在り方を明らかにした。その成果をこれからの教員養成・教師教育に活用していくことを目指した。この教科領域で展開されている指導法やカリキュラム開発の過程の特質を解明し、代表者が実施している学部・大学院の専門科目において教材化・カリキュラム化して提供し、その評価・分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
生活科及び総合的な学習の充実した実践を作り出す教師の指導力・カリキュラム開発能力に関する知見を教員養成や教師教育の場で提供することで、この指導にあたる特に若い世代の教師の実践的な力量形成に貢献することを目指している。特に、教員免許の必修科目として設定される総合的な学習の時間の指導法の充実に資する内容を構築することをねらいとした。

研究成果の概要（英文）：I focus-ized this research in a study of practice in territory "Living Environment Studies and Integrated Studies", make the state of the state of the leadership of the teacher who invents substantial practice clear. I aimed to be utilizing the outcome for future teacher education. I elucidated the method of teaching developed at this subject territory and the characteristic of the process of the curriculum development, made that teaching materials and curriculum, offered that in a special subject of a department and a graduate school, estimated and analyzed the practice.

研究分野：教育方法学

キーワード：生活科　総合的な学習　指導力　カリキュラム開発能力　フィールドワーク体験学習　スタートカリキュラム　対話

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ベテラン教員の大量退職の時代にある当時から現在にかけて、高度な指導力を要求される生活科・総合的な学習の実践の充実を図る上で、本研究が意図しているこの領域の教師の実践指導力の育成は必要不可欠のものと考えられた。さらに、教員免許法の改正により、総合的な学習の時間の指導法が設定されることになった。一方、「学力向上の施策」の対象になりにくいこの領域の実践研究は停滞しているのが一般的に背景として指摘できる。この問題意識から、本調査・分析の進展によって得られた知見を、教員養成・教師教育の実践指導力育成の現場へ還元することをめざす研究として開始した。

２．研究の目的

本研究は、生活科、さらに総合的な学習の時間領域の学校現場での実践研究のあり方に焦点化して調査研究を行い、充実した実践を生み出す教師の指導力・カリキュラム開発能力、指導性の在り方を明らかにし、その成果をこれからの教員養成・教師教育の現場で活用していくことを目的としていた。本調査・分析の進展によって得られた生活科・総合的な学習の時間の指導に関する知見を教員養成・教師教育の実践指導力育成の現場へ還元することを目指した。教員養成・教師教育学の課題を踏まえ、特に若手の教師の指導力の維持・向上に直結・貢献することを主な目的とした。

生活科・総合的な学習の実践を指導する上で、指導が困難だと思われるところとして、主に（1）生活科実践における指導の課題、（2）総合的な学習の時間におけるフィールドワーク体験学習の指導とカリキュラム開発の２点にわたって実践研究を行うこととした。

３．研究の方法

生活科や総合的な学習の実践の先進校の参観や授業記録の分析を行い、そこで展開されている指導法やカリキュラム開発の過程の特質を踏まえて、充実した実践を創り出す教師の指導力・指導性の構造解明を行った。さらに埼玉大学教育学部で研究代表者が担当・実施している教師教育論、生活科指導法および総合的な学習に関連する専門科目において、上記の検討で明らかになった知見を教材化・カリキュラム化して実施し、その評価分析を行うものとした。

本研究で対象にする先進校の授業分析については以下の通りである。「生活科・総合的な学習の時間」は、比較的新しい教科領域であると共に、その指導法も従来の座学による教授を中心とした教科教育と異なって、「自ら課題を見つけ、自ら学び自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力」を育成するための学習方法、すなわち体験学習やその表現の充実、子どもの活動性の重視など、高度な指導力が必要とされる実践である。このような豊かな学習活動とその指導の特質を解明するためには、学習における出来事の「一回性」「偶然性」を尊重し、教室における具体的な文脈の中で臨機に状況と対話しながら手立てを講じる反省的実践の教育方法の立場からの検討を行うことが必要であり、教室で展開された事実を丹念に描き多様な解釈を可能にする研究方法が有効であると考えた。

具体的には、子どもの自律的学習・フィールドワークの展開の過程、その事前指導と学習成果を発表させて討論させるなどの特徴的な学習活動を中心に、映像記録機器などを利用して、実践を記録し、上記の研究目的の視点から検討した。さらに、実践者自身の実践記録を元に分析を加えた。子どもの自律的学習、学習における自治活動などを指導する教師の動きや指示事項の分析とその結果などを中心に分析した。実際は、研究対象校の教員と共同で検討したり考察したりすることもあり、彼らとの共同研究となった。

このほか、現在一般に展開されている生活科・総合的な学習の指導・実践における課題や問題点を明らかにすること、さらに教師の力量形成・指導力向上一般に関する議論や課題などを俯瞰しながら本研究の課題を明確にすることなどを、文献調査や聞き取り調査によって遂行した。生活科・総合的な学習の実践研究の実績を積み重ねている先進校としては、富山市立堀川小学校、奈良女子大学附属小学校、長野県伊那市立伊那小学校や埼玉大学教育学部附属小学校の公開授業研究会の参観を行った。

なお、埼玉大学教育学部及び教職大学院で開講している本研究課題に関連した科目として、以下の科目を担当・実施している。

・教師の成長と教師教育・生活科概説・生活科指導法・総合学習の原理と方法（以上学部）

・総合学習カリキュラム開発演習（大学院）

これらは教師教育論、生活科指導および総合的な学習に関連する専門科目であるが、上記の先進校事例の検討で明らかになった知見を教材化・カリキュラム化してこれらの科目で提供し、研究成果を埼玉大学学生･院生に還元しつつその学習過程に対し評価･分析を行うこととした。

子どもの体験や活動性を重視する生活科・総合的な学習においては、その活動の一つとしてフィールドワークを取り入れることが多く行われているところである。しかし、座学における学習とその指導とは異なり、時に「活動あって学びなし」「はいまわる経験主義」と批判的な指摘がされるように、活動や体験を指導して豊かな学習を立ち上げるには、教師に高度な指導性

が要求されるところである。本研究では、まずフィールドワーク体験学習の意義とその指導過程を、優れた実践事例の検討から明らかにした。従来から学習指導要領でその教育内容の記載が詳しくある他の教科と異なり、総合的な学習の教育内容は例示にとどまり、そのため「各学校の創意工夫」の余地を多く残す領域となっている。総合的な学習におけるカリキュラム・マネジメントにおいては、子どもの個性や興味関心、地域の実態などを教育内容に反映させることが求められるが、総合的な学習の現場での導入時に比べて、現在はカリキュラムの形式化・マンネリ化を見ることが多い。そこで、本研究では、代表者が担当するこの領域に関連する科目の受講生とともに、この領域の本来の設定の趣旨にあうよう、フィールドワークを行い、その成果に基づいて実際にカリキュラムを作成させ、そこで生じる実践上の課題について受講生と共に考究した。

これらの科目の学ばれ方及び評価分析の具体は、以下の通りである。従来の講義形式の座学だけでなく、体験学習・ワークショップ・参加型授業・授業参観など、学生自らが活動する学びの場を多用した。このような学生の学びの過程を明らかにするために、学生の参加型授業の結果の記録を行った。「生活科・総合的な学習」観の構築の過程と同時に、教職観・学校観・授業観・子ども観などの変容について、学生自身によってどれくらい振り返ることができるか、さらに自らが得た教育的知見について自覚し表現できるかについて、検討した。

４．研究成果

（1）生活科の指導力・カリキュラム開発力の向上に関する研究は以下の通りである。

①埼玉大学教育学部附属小学校の生活科実践を対象にして、子どもたちの対話への意欲を喚起する生活科指導の要を明らかにする研究を行った。学習指導要領の改訂に際して、生活・総合だけでなく、あらゆる教育活動の中で、アクティブ・ラーニングの導入と主体的対話的で深い学びの成立が求められている。対話活動の推進は今後加速していくが、その先駆けとして生活科における充実した対話活動の指導の在り方を探究した。対話は、子どもたちの自発的な意欲に支えられて展開するものであるが、教師はそのような意欲を喚起するさまざまな手立てを講じているものであり、その教師の手立て・工夫を取り上げて意義づけた。

本研究で研究の対象とした対話は、生活科の授業における伝え合い交流しあう活動の中に多く見られた。この対話の相手は学級の友達であったり、活動先で出会った身近な人々であったり、家族であったり、人だけでなく様々なものやできごととの対話、自分自身との対話を行っていた。これらと子ども自身のかかわりを深めることが、生活科がねらっている教科の本質であり、その手立てとして対話は欠かせない。しかし、そのような教科のねらい、教育的な意図がもっとも強く反映される対話の相手は、まずは教師である。教師が対話の相手として直接子どもにかかわり、子どもの内なる気付きや思考を引き出し、その表現を豊かで確かなものにするための問いかけや投げかけを行うことが、特に低学年の子どもにとっては重要である。この手立てを通じて、子どもは対話の価値を実感し、望ましい対話のあり方を身につけ、それを基盤にして多様な他者との対話へと発展させていくその過程と重要性を指摘した。

さらに、対話活動を豊かにする教師の役割は、このような直接の対話の相手として存在することだけでなく、間接的にも様々な手立てを講じることにもあった。子どもの気付きを可視化し共有する表現の場を多様に設定すること、個の表現の場や共有を目的としたツールを効果的に準備し、適切なタイミングで子どもに提示すること、対話の価値を子どもが自覚できるよう指導を行うことなどが、子どもの主体的で豊かな対話を支える教師の役割として必要なことであることを指摘した。この他、子どもが自ら学びの必要感と楽しさをもって取り組めるようにする必要があり、そのような必要感を自覚する契機を作り出す手立ての工夫が見られた点、他教科の特質や他校種での発達段階の違いを踏まえて、それぞれに指導法や手立ての工夫をする必要がある点、等を考究した。

②次に、平成 29 年学習指導要領改訂に際し、生活科を中心としたスタートカリキュラムの編成と実施に関しては、更に改善を加えていっそう充実した実践を行う必要があるとされたことを受け、教職大学院の現職院生と共に、以下の様な研究を実施した。埼玉県内 A 市小学校の第１学年担任を対象とした質問紙調査を行い、子供の適応状況、課題と改善点を明らかにすることを試みた。この調査を元に、スタートカリキュラムの編成と実施の実態に基づいた課題と今後の改善点について考察した。

スタートカリキュラムのデザインを行う際には、「幼児期の発達や遊びを通した総合的な学びが小学校の学習や生活において発揮できるように、また、児童の思いや願いをきっかけとして始まる学びが自然に教科等の学習につながっていくように、単元の構成と配列を行うことが大切である」とされている（『発達や学びをつなぐスタートカリキュラム－スタートカリキュラム導入実践の手引き－』文部科学省・国立教育政策研究所・教育課程研究センター編著２０１８年４月）。幼児期の教育との円滑な接続をはかることは、これからのスタートカリキュラムの改善点としてより重要視していくべきことであると考えられる。この点について、これまでスタ

ートカリキュラムを実施している１学年担任の意識について調査を行った。併せてこの視点でスタートカリキュラム改善のために必要なことを考察した。

上記調査結果から、スタートカリキュラムの改善点として、以下の点について指摘した。第一に時間設定の柔軟さ、第二に活動の場や環境づくりの推進、第三に教員相互の共通理解の必要性、第四に保護者の不安を和らげ共通理解を図る必要性、第五に編成・実施の際の指導上の配慮である。子供の実態を把握するためには、幼児期の教育における子供の実態を踏まえること、そのためには、幼保小の教員同士の連携交流の推進と同時に、小学校においても子供自身が持てる資質能力を発揮する活動や表現の機会設け、その中から教員が子供を見取る局面を豊かに設ける必要があることを提示した。

この他、教職科目向けテキスト『初等生活科教育』においては、第１章の「初等生活科教育の意義と目標」の執筆を担当した。学習指導要領の改訂に際して改変があった生活科の目標について、他教科とは異なる生活科の特質と育てようとする資質能力についての解説をおこなった。

(2) 次に、総合的な学習の実践における指導性の探究とカリキュラム開発の力量形成にむけて行ったのは、以下の実践である。

①代表者が担当する学部専門科目「総合学習の原理と方法」において、メディアリテラシー教育におけるカリキュラム開発に関する研究教育を通じて、受講生を伴ったNHKスタジオパークのフィールドワークを行い、体験学習の意義について実践的に検討した。受講生はそこで深化された課題意識を元に、メディアに関する探究的な学習を進め、特に批判的思考力の育成について焦点化して探究しているものがみられた。探究的な学習の成果の発表会を行う際には、NHK解説委員の方を指導助言・ゲストスピーカーとして招き、有益な講評を得ることができたことに加えて、この授業における一連の活動をニューズレターにまとめる活動を展開した。

②教職大学院の共通科目「教育課程の課題探求」及び選択科目「総合学習カリキュラム開発演習」において、本研究の過程で実施したフィールドワークで訪れた先進校の事例を元にカリキュラム開発についての講義を行った。研究成果の一端を授業で提示し、現職院生と学卒院生が共同して、校種や教科の専門性を越えて総合的な学習のカリキュラムを考えるグループワークを行ったが、受講生にとっては総合のテーマ設定自体の重要性や難しさが実感できるグループワークとなった。上記の研究実践をもとに、令和元年度後期より必修化した教職科目「総合的な学習指導法」の展開ベースにこの領域の専門性の向上を系統的に構想することができた。

以上のような研究活動を行ったが、しかしながら、研究期間内に研究成果についてまとめることができず、研究成果の公表は今後に持ち越された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①宇佐見香代、対話への意欲を喚起する生活科の指導について－アクティブ・ラーニングの先駆けとして－、埼玉大学附属教育実践総合センター紀要、査読無、第１６号、2017 年、117-124

〔学会発表〕（計１件）

①宇佐見香代・石田典子、1 学年担任の意識調査から見る入学時指導の課題について　－スタートカリキュラムの改善に向けて－、日本生活科・総合的学習教育学会第 27 回全国大会、2018 年

〔図書〕（計１件）

①　宇佐見香代（片平克弘・唐木清志編著）、ミネルヴァ書房、初等生活科教育、2018 年、3-12

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。